吉備の古代史シリーズ　第 18 回（こぼれ話）

「吉備に五十猛命の足跡？」

NPO 法人福岡歴史研究会理事　石合　六郎

吉備の古代史シリーズの「素戔嗚尊の剣」の＜上、下＞（2022.01、2022.04 掲載）で、日本書紀に記されている「素戔嗚尊が大蛇退治に使った十握の剣（別名に天羽々斬（あめのははぎり）、蛇之麁正（おろちのあらまさ）など）が吉備にあった」との正しさをいくつかの伝承で証明できた。前回の１７回「銅剣を通してみる吉備」の中で、「赤磐市石上にある石上布都魂神社の本来の場所」について、「御津町史」（昭和６０年刊）にいくつかの記録があることなどを記した。今回はそれらをもとに同神社についての新しい知見を探ってみる。

◎現在地は正しいのか

２０１８年にふくおかアジア文化塾の吉備ツアーの方々を石上布都魂神社へご案内したとき、同神社の物部宮司から「吉備のこの辺りのどこかに古代の石上布都魂神社があったのだろうが、江戸時代にここが選ばれる時、ほかにも候補地があって研究されている方がいらっしゃったのですが、もう亡くなられて詳しいことはわからないです」と思いがけない話を聞いていた。

また、筆者が新聞社在職中に、同神社にかかわる小さな囲み記事を発見し、長らく筆者の資料箱に眠らせていた。それを同回のコラムで「鉄剣と間違われた銅剣」と題して紹介した。その一部を次に再録する。

「昭和３３年のローカル面に『古墳時代の剣現れる』との見出しが目に入った。これは何かの役に立つかもとコピーしておいた。その後、この記事の真偽を確かめようと御津町に問合せたのが長谷川一英氏(当時の文化財担当者)だった。そこでとんでもない話を聞いた。『あの記事には迷惑を蒙っているんです。鉄剣ではなく銅剣です。間違いが多いんです』と。布都魂神社の伝承に惑わされたものだろう。高校教諭の談話がついている。」というものだ。

当時は考古学の専門家が教育委員会におらず、高校の部活で発掘調査がされることも多く、その指導をしていた高校教諭が埋蔵文化財についてコメントすることもあったようだ。そんなかで、銅剣が鉄剣に間違われてしまったのだろうだ。しかも、日本書紀にある

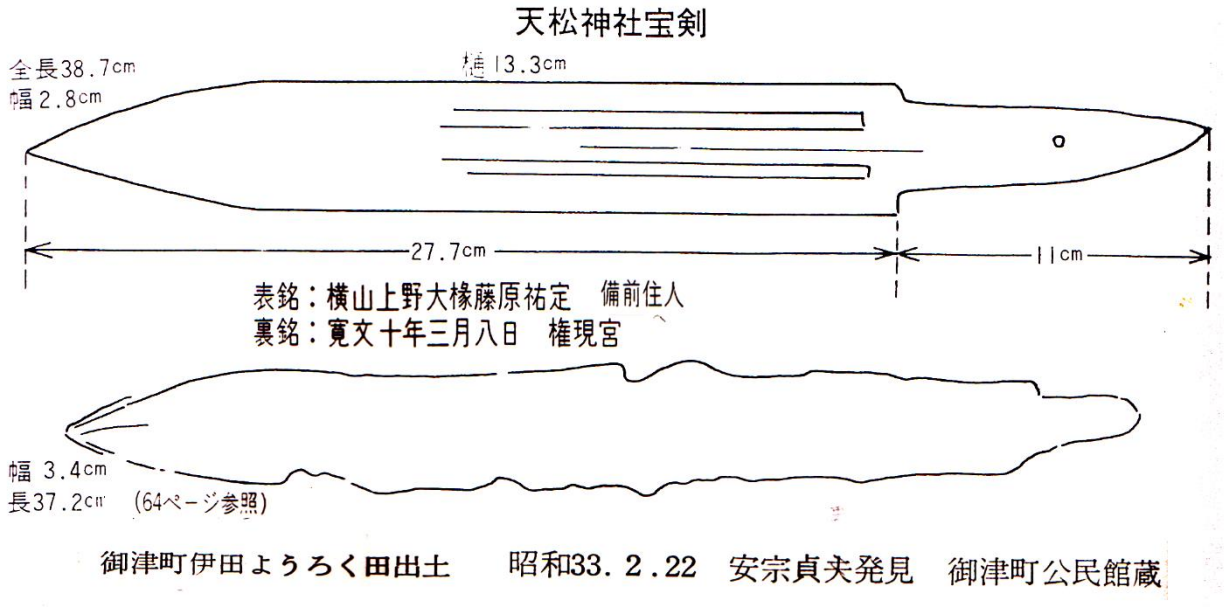
「素戔嗚尊が大蛇退治に使った十握の剣が吉備の神部にあった」という記事と結びついたのだ。

◎新資料と出会う

「銅剣を通して…」を書くにあたって、先の長谷川氏に連絡を取った。「御津町史」に同神社近くから出土した銅剣のことや、候補だった別の神社のことが書かれていることを教えていただいた。現在は、御津町が岡山市に合併したことで、岡山市教委の文化財課で主査を務めていた。「御津町史」に次のように記されていた。

「石上を含めてこの地域は平岡郷とよばれ、更に古くは詫美郷とよばれ武技保(旧竹枝村)の地域も加わっている。再建当時は元の所在が不明で新庄説や伊田石上(いしがみ)説があったが現在の石上が決定された。(古文書)によれば『西上の村名を石上と改めた』と書かれている。」（同書Ｐ３０９）

当時もいろいろ議論があり、候補地は３か所があったが、根拠をあまり示さないまま、今の石上布都御魂神社に決まったようだ。同書３０７ページには現在の石上布都魂神社以外の２個所（新庄説の天松神社と伊田石上説の伊田のようろく田出土鉄剣＝銅剣の間違い＝）についての資料として、次のようなイラストが掲載されている。



上の剣は新庄説の天松神社に伝わる宝剣。下は伊田説の伊田ようろく田から出土した剣（発見当時は鉄剣と見られていたが、今では銅剣と判断されている）＝「御津町史」第５章「近世」第５節「宗教と文化」吉備の石上（ｐ３０７～）

本文では２個所について､それぞれ次のように記されている。

新庄説の天松神社

＜天松神社＞

「天松神社の宝剣は寛文十年(一六七〇)三月八日、名匠横山上野大椽藤原祐定の作である。一方師霊神社の御神躰である御正印を同年吉田家まで物部肥後が戴に行っている。天松神社は当時権現宮と称していた平岡郷の寄宮もあって新庄説はともかく宝剣の御神躰が新しく作られたわけである。」（同３０７）

＜伊田ようろく田＞

「新庄川流域古墳群の特徴的なことについて述べたが、上伊田の大谷遺跡に含まれるヨウロク田とよばれる地名の所から、長さ三七･二センチメートル の鉄剣が出ている。岩井山遺跡も流れに沿った遺跡で、水田面に散布している土器片から見て、奈良平安時代まで続いた遺跡と思われる。(三〇七ページ参照)」（同Ｐ６４）

「伊田ようろく田」のある岡山県動物愛護センター

◎真説はどこか

物部宮司の述べるように、この地域（旧御津町・旧芳井町）のどこかに素戔嗚尊が大蛇を退治した剣を祀ったがあったはずだ。

今の同神社なのか？　、同神社から４．８キロの天松神社か？　また同６．４キロの伊田ようろく田か？　疑問は尽きない。

＜筆者の考察＞

① **現神社**はシチュエーションが最も素晴らしい。特に神社建物のある山の頂上の参拝者を圧倒する磐座の大きさ、ごつごつした岩肌も秀逸だ。３５０年以上信仰の対象となっており、文化遺産としては捨てがたいものであろう。

② **天松神社**は物部氏が御正印を吉田家まで戴に行っているとあり、地域や池田家のある程度の意向をくんでいたのだろう。同時に新たに剣を仕立てたのだから、有力者の支援もあったのだから、伝承もあったのかもしれない。

③ **伊田ようろく田**は近くに「伊田石上」という地名もあるとともに弥生の大集落・大谷遺跡に含まれ、その一部である小字「ようろく田」から銅剣（中細型Ⅱｂ）が出土している。江戸時代は当然、銅剣は出土しておらず､「伊田石上」の地名から候補地にな

っていた。「ようろく田説」は昭和 33 年の発見以降だろう。発見当時は岡山当時営林署の苗畑を開墾中だった。その作業中に偶然発見されている。鉄剣に間違われたことはすでに述べたが、それをその後、考古学的に研究した長谷川氏は「全面が錆に覆われ一部に緑の錆もあり、とても薄い状態だった。分類上は細型Ⅱｂ」と証言している。問題は地名の「伊田」である。河村哲夫氏は素戔嗚尊の拠点について、神社伝承等をもとに北部九州なかでも遠賀川周辺に勢力を張っていたことを述べている。田川市にある「伊田」という地名について、「風治八幡神社の祭神・伊田大神に由来する」（日本古代通史４巻ｐ１２９）という。全国の「中臣印達神社」（たつの市）「射楯兵子神社」（姫路市）「伊太祁曽神社」（和歌山市）など全国１５例を挙げ、「イタ」が素戔嗚尊とその子・五十猛命とかかわりがあることを一覧表にまとめている。五十猛命が素戔嗚尊の大蛇退治の剣を吉備にもたらせた可能性が高まった。その地名「伊田」を持ち、弥生時代の銅剣出土地だとすれば、五十猛命かその子孫が吉備に入り、剣を伝えたとの仮説はおおいに成り立つだろう。

④ **銅剣の年代**　細型銅剣Ⅱｂは紀元前とする見解が多いが、島根県斐川町の荒神谷遺跡から３５８本の銅剣が土出したが、型式分類は中細型Ⅱｃである。筆者らはこれを大国主命の宝物だととらえている。国譲りがあった時代の直前まで中細型Ⅱの銅剣を祭祀に利用していた可能性があるとみている。大国主命の時代（西暦２３０～２６０年）のものとみて大きな違和感があるとは考えてない。

⑤ **地名起源に異説**　江戸後期の漢学者で、岡山藩儒官・大澤惟貞の「吉備温故秘録」によれば地名の起こりは「射田」が置かれていたことに由来するという（「日本歴史地名大系３４・岡山県の地名」）。射田とは奈良・平安時代に、射芸奨励の費用にあてるために、天平勝宝六年（７５４）諸衛府(えふ)にあてがい置かれた不輸租田。射騎田のことだという。しかし、それ以前にあった地名にちなんで、射田に指定した可能性もある。ようろく田説は完全に否定されるわけではない。

◎伊田ようろく田説が真実なら

これまで筆者が書いてきた大蛇退治の剣は吉備にあったは本当だ。吉備津彦兄弟が吉備入りを果たした時、大きな抵抗は見られなかった。大きな争いの記録はなく、後世の作である「温羅」伝説も、金山寺の僧侶や吉備津神社系の神官によってアレンジされながら今の物語が紡がれていったのだろう。

剣の方は崇神天皇の時代、四道将軍として入ってきた吉備津彦命らが、剣を吉備津神社かその元となった館に移したのだろう。このことは江戸時代の著作物では少し異なり、その時代に大和へ移したとされている。一方、大和の石上神宮の伝承では仁徳天皇の時代に吉備から移したとされている。それに関連して平成 17 年（2005 年）の大屋根の吹き替えの際、秘伝文書の通り、レプリカと思わせる十握の剣が三重の箱に入れられ祀られていることが確認されている。それぞれの伝承が異なる事情があるように見える。

「伊田ようろく田説」が確定すれば、吉備津神社に収まる以前のことがはっきりする。十握の剣流転の経路もきまる。すなわち、「出雲→吉備のようろく田→吉備津神社→石上神宮→同禁足地→同神宮本殿」が確定する。

これまで筆者は、吉備に素尊の剣は、大国主命か稲田一族が吉備にもたらしたと考えていたが、今回の論考で「五十猛命」かその子孫に絞ることができた。素戔嗚尊の晩年を支えたのは五十猛命だろう。となると、素戔嗚尊と五十猛命の墓はセットで考えてよいだろう。大国主の墓は出雲の西谷墳墓群の最後の最大の四隅突出型墳丘墓と考えられるので、素戔嗚尊が最後に活躍した出雲西部で探してもよいと再認識したところだ。この点はまさに蛇足だが、いずれ本格的な調査を期待したい。

プロフィール

いしあい・ろくろう　NPO 法人福岡歴史研究会理事　石合　六郎　昭和 20 年 4 月

、岡山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年に卒業。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と出合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会理事。現住所は岡山市中区。

「吉備津彦命と温羅」　　AMAZON で販売中

（ペーパバック＝1200 円　Kindle 版＝デジタル６５０円）

吉備の古代史シリーズ　執筆記事一覧

第１回　二人の天皇が行幸された谷（2020.07）

第２回　巨大古墳を考える（上）吉備津彦の時代（４世紀）（2020.10）

第３回　巨大古墳を考える（下）御友別の時代（５世紀）（2021.01）

第４回　温羅伝説を考える（上）―こんな物語だった（2021.04）

第５回　温羅伝説を考える(中)―成立過程とその起原「神仏習合の中から誕生」(2021.07)

第６回　温羅伝説を考える（下）―桃太郎伝説の誕生「日本人の心映す鏡」（2021.10）

第７回　素戔嗚尊の剣（上）―吉備のどこにあった？「十握の剣流転の真実」（2022.01）

第 8 回　素戔嗚尊の剣（下）―どんな形だったか？「邪馬台国時代の北部九州と類似」（2022.04）

第９回　造山古墳の被葬者を探る（上）「吉備海部の娘・黒日売命か」（2023.07）

第 10 回　造山古墳の被葬者を探る（中）「吉備海部は備中にいた」（2023.10）

第１１回　造山古墳の被葬者を探る（下）「謎を解く肥後系古墳と血脈」（2024.01）

第１２回　播磨の戦いはあった !! ――片山神社伝承が証明「稚武彦は再度播磨へ」(2024.04)

第１３回　卑弥呼の剣と楯築の王「日本海ルートでつながる筑紫と吉備」（2024.07）

第１４回　吉備と出雲＜上＞「大国主命の祭祀受け入れる」（2024.10）

第１５回　吉備と出雲＜中＞「古墳起源に関わる楯築と四隅」（2025.01）

第１６回　吉備と出雲＜下＞「大国主命の墓がわかった」（2025.05）

第１７回　「銅剣を通してみる吉備―国家形成期の地域」（2025.07）

第 18 回　「こぼれ話　吉備に五十猛命の足跡？」（2025.09）